東京大学宗教学年報 XXXVIII（2021 年）165-171 頁

ニューカマーによるエスニックチャーチの形成と活動に関する研究の動向
―相互ケアのあり方を中心に―

坪井　俊樹

本稿では，ニューカマーの宗教についての近年の研究動向のうち，定住者のコミュニティにおける宗教の持つ意義と，宗教を通じた地域社会との連携について，サーベイを行う。筆者は，COVID-19 の蔓延と社会的な活動の大幅な自粛の中での宗教のあり方の変化について，国際交通網の麻痺や，公的支援へのアクセスの困難といった問題を抱える外国人移住者が属する，エスニックチャーチの働きから考察したいと考えている。その前段階として，教会が信徒にもたらす宗教的な影響などに関しての先行研究の調査を試みたが，エスニックチャーチに関連する多くの論文は，家族や地域のつながりをテーマにした社会学・文化人類学的な要素の強いものであり，宗教の持つ内面的・精神的な側面に踏み込んだ記述は少ないように思われる。

これまでの研究が，どこに焦点を当てているのかを明らかにし，先行研究の視座と，欠けている点を再確認するためのサーベイを行うことは，アフターコロナ社会におけるエスニックチャーチを研究する上で重要な意味を持つといえる。本稿では，フィリピン人とベトナム人のエスニックチャーチについての先行研究を中心にサーベイを行う。その理由は，両集団が配偶者や二世を擁し，日本社会に根を下ろした「第 1 の世代」が形成されていること，また，2010 年代後半から流入が始まった，短期滞在の技能実習生という「第 2 の世代」を抱える，という共通点を持ち，地域に定着した集団と新規に参入した集団を擁しているからである。そして，第 1 世代はそれぞれ「エンターテイナーや農村花嫁などとして流入し，結婚等を通じて定住した」「難民として 70-80 年代に移住し，統一後の第 2 世代と異なる南ベトナム人としてのアイデンティティを持つ」という特徴を持つ。

1. エスニックチャーチに関する総論的な研究の動向

20 世紀初頭より，日本のアジアへの進出や，アジア・ヨーロッパ諸国の政変に伴い，多くの外国人が日本に流入し，エスニックチャーチが形成され，在日大韓基督教会のような独立した教団も生まれた。東南アジア等への勢力拡大を目指していた政府も，チャーチの形成を肯定的に受け止めた。しかし，太平洋戦争中に多くの教会が破壊され，敗戦により多くの移住者が帰国したことにより国内のエスニックチャーチの規模は縮小した。その後は，在日コリアンや中国人による寺院・教会が活発に活動する一方，法制度の厳格さや，地理的な距離の遠さから，80 年代に至るまでは，朝鮮半島や中国，ベトナム難民以外のエスニック集団の流入はほぼなかった。そして，80 年代後半に始まるバブル景気は，中東や東南アジアからの人口流入をもたらし，また 90 年の入管法改正により中南米から日系人労働者が多く流入した。国内に既存のコミュニティを持たないニューカマーは，それぞれにエスニックコミュニティを創出した。そして，アイデンティティにつながる宗教活動への需要や，社会の

辺縁での困難な生活に対する物心両面でのケアのために，費用を分担し，あるいは経済的余裕のあるメンバーの寄付を通じて，エスニックチャーチが形成された。

80 年代以降に流入した第 1 世代が，結婚などを通じて日本に定住し，エスニック集団としての成熟が見られた 2000 年前後に，後述の各章で見られるような，チャーチについての最初期の論文・書籍が出版された。しかし，その宗教活動について，国やマスメディアが注目するのは，2010 年代に入ってからであった。例えば，文化庁の宗務課が，在留外国人の宗教活動を調査したのは，2012 年のことであった。これは，認証事務のための内外の宗教団体の状況の基本情報として，本国の宗教事情と日本への移住者のそれの調査を，学識経験者を通じて行ったレポートだが，移住者の宗教活動についての記述は貧弱である。また，マスメディアにおいても，2015 年に毎日新聞大阪本社の取材チームが宗教学者の釈徹宗と共に，23 のエスニック集団・宗教団体の活動を取材した『異教の隣人』（2018）などの事例がある。しかし，ニューカマーの宗教活動をテーマにした記事のほとんどはルポルタージュの域を出ないもので，学術性は低い。

日本における移住者の宗教についての書籍や特集の多くは，様々なチャーチについての論文をまとめたアンソロジー的なものである。初期のものとして，吉原和男とクネヒト・ペトロによる『アジア移民のエスニシティと宗教』（2001）がある。本書は，人類学の立場から，アジア諸国のマイノリティの宗教活動を論じるもので，在日ベトナム人（川上郁雄），在日ビルマ（ミャンマー）人（田沼幸子），中華街の華僑（王維）についての論文を収めている。

2000 年代に，エスニックチャーチについての論文を多く掲載した雑誌として，『アジア遊学』がある。39 号（2002.5）では，「移民のエスニシティと活力」いう特集を組み，韓国人教会（野口生也）やムスリム社会（王建新）などについての論文を掲載している。また，117 号（2008.12）ではスィク教（東聖子）やムスリム児童の教育（服部美奈），名古屋地域のモスクとムスリムコミュニティ（倉沢宰）についての論文が掲載されるなど，宗教というファクターが重要視されていたことが見て取れる。

2011 年に「宗教の創りだす絆」というシンポジウムで行われた，宗教社会学者の三木英の講演は，ブラジル人教会とモスクの複数の事例を紹介し，日本社会と交差する部分が少ない「飛び地」と化していること（三木 2012: 64）を指摘する。そして，困窮者救済や異文化学習などのファクターを通じ，受け入れ側が関心を共有することで，両者の思いの理解が可能になること，また，信仰共同体と地域社会の媒介者が生まれる中で，チャーチと日本人の交わりの強化や，軋轢の発生を伴う新たな段階に入る，と予測する（三木 2012: 65-67）。三木はその後も移住者の宗教に関する論文を発表し，編著者として『日本に生きる移民たちの宗教生活――ニューカマーのもたらす宗教多元化』（2012）や『異教のニューカマーたち――日本における移民と宗教』（2017）の刊行に携わっている。

また，世界的不況により，国内の外国人労働者が大量失業したことで，宗教関係者による移民への生活支援が可視化され，移民との共生に向けた宗教の取り組みを研究することの重要性が再認識された。高橋典史らは，2012 年に「現代社会における移民と宗教」プロジェクトを立ち上げた。そして，共同研究「日本のカトリック教会による移住・移動者支援の実証的研究」（2014-2016）や「多文化共生社会の構築における宗教の社会的役割に関する実証的研究」（2017-2019）を企画し，ニューカマーの宗教研究の入門書『現代日本の宗教と多文化共生――移民と地域社会の関係性を探る』（2018）を出版している（高橋 2018: 4）。

2. フィリピン人エスニックチャーチに関する研究動向

80 年代後半，バブル期の都市部では，歌手やバンド奏者などの「エンターテイナー」として，農村部においては，農家の後継者の嫁ぎ手である「外国人花嫁（農村花嫁）」として，多くのフィリピン人女性の流入が見られた。2004 年以降のビザ厳格化によって，いわゆるフィリピンパブのような「夜の仕事」に代わり介護・医療従事者や食品加工などに従事する者が増加し，在留者の数は徐々に増加している。2016 年の時点で，24 万 3 千人のフィリピン人が在留し，そのうち 72.7%が女性である（永田 2018: 158-159）。

また，2010 年の入管法改正以降，技能実習生として 20 代のフィリピン人が男女問わず流入している。実習生の宗教行動についての論文はまだ少ないが，川添航によれば，一部の実習生においては，定住者からの情報を得られるフィリピン人社会の拠点として，また会話によりストレスを解消する場所として英語ミサが活用されている（川添 2020: 228）。

チャーチの形成時期も，京都市では 1986 年（永田 2018: 164），六本木のフランシスカン・チャペルセンターでは 1991 年（カスヤ 2008: 159）と，大都市圏ではフィリピン人人口が急増した 80-90 年代が多い。また，形成に至る経緯には，フィリピンにルーツを持つ宗教者が発起人になるケースと，信徒の要望で神父が集会を始め，さらにフィリピン人が集まるといった，自然発生的なものが存在する。

フィリピン人チャーチの研究の最初期のものとして，マテオ・C・イバーラの『「滞日互助網」――折りたたみ椅子の共同体』（原著 1999，邦訳 2003）があり，市川誠が同書の事例に依拠して豪州との比較を行うなど，多くの研究者がこれを引用している。その後一旦研究は途絶えるが，2008 年には『上智アジア学』で「日本のカトリック教会と移住民」という特集が組まれ，カトリック東京国際センターの設立にかかわったイエズス会神父，カトリック市川教会の助任司祭，東京大学の生命科学者の 3 人のフィリピン人に対して 2005 年 3 月に行ったインタビューを掲載している。

2010 年代に入り，在日二世の教育の問題などがクローズアップされる中で，そのコミュニティの内部で宗教が果たす役割についての研究も積極的になされるようになった。チャーチにおける二世の子どもへの英語教育についてのインタビュー調査を通じて，コミュニティの主体的な教育支援のあり方を論じた三浦綾希子（教育社会学）の 2012 年の論文や，東日本大震災後に被災地で形成されたチャーチと，内部で生じた「夜の仕事」の従事者への，水産加工などの「昼の仕事」の従事者からの抵抗と，それに起因するチャーチの解体を，タガログ語ミサとパブへの参与観察やインタビューにより調査した坪田光平（社会学）の 2013 年の論文などがこれに当たる。

また，震災を契機とするチャーチの社会構造の変化に関する研究として，上智大学アジア文化研究所が 2017 年 11 月 11 日に行ったワークショップ「フィリピン出身者を迎え入れて――3/11 被災後のカトリック大船渡教会を中心に」がある。15 年にわたり大都市のフィリピン人信徒が多い教会での観察・調査をしてきた（寺田 2019: 4）寺田勇文が中心となり，日本人男性・フィリピン人女性の信徒・フィリピン出身の神父のスピーチと総合討論がなされた。被災以前には，言葉の壁や多忙のため，フィリピン人が教会を訪れることはほぼなく，英語のミサも中止されたままであった（寺田 2019: 6）。しかし，被災をきっかけにその存在が注目され，神父らによって避難所のフィリピン人への呼びかけがなされた。集まった人々を，地域社会の一員として認め，就労支援や文化交流が行われた結果，信徒は被災前の 2 倍に増加した（寺田 2019: 11。信徒の菅原圭一の証言）。

2016 年には沖縄移民研究センターの『移民研究』において「沖縄・先島地域のトランスナショナルな移動と社会関係――フィリピン人女性を中心に」という特集が組まれた。この特集では，石垣島と宮古島のフィリピン人コミュニティに対し，それぞれ 14 人・20 人のフィリピン人とその家族・支援者らへのインタビューによる調査をしている。野入直美（社会学）の論文によれば，宮古においては，集いの形成は 2010 年代と新しく，沖縄・南西諸島の伝統的な経済的相互扶助システム「模合」を取り入れた，「教会模合」と呼ばれるシステムのように，地域の伝統文化と融合した，フィリピン人のみのインフォーマルな集まりが中心になっている（野入 2016: 17）。一方，石垣では日本語と英語を用いたミサへの参加によるフォーマルなグループが早期に形成され，模合やフィリピン式の聖母マリア信仰の集まりであるロザリオなどのインフォーマルなグループと併存している（野入 2016: 13）。また，同誌には八重山毎日新聞の松田良孝が，2011 年 11 月より始めた，カトリック石垣教会内外でのインタビューやロザリオの集まりへの参与観察，マニラ・セブの教会及び石垣への移住者の家族への取材（松田 2016: 56）を通じた論文も掲載され，共同体における宗教の立ち位置についての考察がなされている。

独身の男性が大半を占め，労働者やビジネスパーソンとして日本に定住するケースが多い他のエスニック集団と異なり，技能実習生が流入する以前のフィリピン人エスニック集団の多くは，日本人の家庭と，仕送りを通じた祖国の家族社会との関係の中で生活する女性が多数を占めていた点に特徴がある。神父の数が限られており，地方の教会ではごく少数の移住者の希望に沿った活動ができず，社会関係資本の重要性が高まらないかぎり，信仰を通じたエスニック集団の力は弱まる傾向が指摘できる。また，地域の共同体の大きさの違いや，バックグラウンドにおける格差の存在の有無が，地方におけるエスニック集団の存続に大きく関わっている。

3. ベトナム人エスニックチャーチに関する研究動向

ベトナム人の日本への流入には，大きく二つの山がある。ベトナム戦争後に難民申請を受けた「インドシナ難民」の人々と，2010 年代以降の技能実習生である。

サイゴン陥落以降，1979 年をピークに日本に流入したインドシナ難民は，難民事業本部による定住支援を受け，1 万人が定住した（高橋 2014: 5-6）。当時の日本の宗教団体による受け入れのための活動については，高橋典史による一連の論文が詳しい。

統一直後のベトナムでは，多くの宗教者が亡命したことと，日本のベトナム人にも境遇を同じくする宗教的リーダーを求める意識があったこと（川上 2001b: 60-62）から，早い段階で，ベトナム人聖職者を擁するエスニックチャーチの成立が見られた。

インドシナ難民の定住から 20 年近く経った 2000 年代に入ると，ベトナム人社会への関心が強まり，人類学や社会学などの側面から多くの書籍・論文が著された。川上郁雄の『越境する家族――在日ベトナム系住民の生活世界』（2001）などが，ベトナム人コミュニティの宗教活動についての研究を含む最初期の文献といえる。

川上はその後もベトナム人社会に関する論文を多く執筆しているが，在日二世の子どもへのインタビュー・観察の場として，教会で行われる，一世の移住の歴史やベトナム語を教える教室を用いる（川上 2008: 101-102）など，調査活動の拠点として宗教施設を利用している。また，二世の発言から，両親のアイデンティティを支える宗教的規範や実践が，自分

が日本社会に所属していないことを実感させるものとして認識されている問題を論じ，世代間での宗教性への認識の差の存在を指摘している（川上 2002: 117）。

野上恵美の 2016 年の論文は，神戸市のカトリック教会と，埼玉県の寺院に対する参与観察と，それに基づく比較研究を行っている。寺院に関する記述では，離散状態にあるエスニック集団の統合の場としての意義が記されている（野上 2016: 52）。

野上が調査した教会については，2018 年の論文でさらに詳細に論じられている。日本人信徒の 3 分の 1 が高齢である一方，ベトナム人は若者が多い傾向にある（野上 2018: 95-96）。同論文の後半では，神父へのインタビューが掲載され，キリスト像の設置をめぐる日本人との衝突や，高齢の日本人信徒の手助けを巡る問題など，日本人社会との軋轢や，教会側の相互ケアへの意識が見られる。

2010 年代以降の技能実習生における宗教の研究は極めて少ないが，高橋の 2018 年の論文では，難民だったシスターらが中心となって，行政や医療へのアクセス，子どもの学習などの支援を技能実習生らに提供し，教会の交流イベントに招くことで居場所を与える事業が紹介されている（高橋 2018: 82）。

ベトナム人移住者の第 1 世代は，「難民」として流入し，積極的な支援を受けていた点で特徴的である。カトリック教徒においては，難民支援で関わった教会がそのまま宗教活動の場となった一方，仏教徒においては，日本仏教との文化の差が大きいために，ベトナム人僧侶を中心に独自のチャーチを形成する傾向が強いといえる。移住者の信仰・文化活動については世代間で認識に差があるが，近年の技能実習生が置かれている困難な状況への問題意識は，ベトナム人を中心とする相互ケアのプラットフォームとしてのチャーチの存在意義を改めて高めているといえる。

4. 今後の展望

困窮者の救済や，二世世代への民族教育といった，公的な支援の手が十分に回っていない分野における，マイノリティの共助の空間として，それぞれの集団においてチャーチが有効に機能している，ということが，先行研究を通じて如実に表れている。

しかし，それらの支援をもたらしている各宗教団体の宗教者や信徒における，家族から継承された信仰，あるいは新たに獲得された信仰といった，それぞれの内面における宗教の意義についてアプローチした研究はあまり見られない。

また，三木が提示する「飛び地」的チャーチのあり方について，チャーチによる日本社会へのアプローチが，災害ボランティアなどの形で存在する一方，改宗ムスリム・ムスリマなどの事例を除けば，移住者の配偶者のチャーチへの関与は殆ど論じられておらず，日本人のエスニックチャーチへの関与のあり方が確認できない。宗教そのものへの不信感や，マイノリティへの敬遠以外に，どのような背景があるのか，という点も明らかでない。

宗教の多様化・私事化の問題や，困難の中での精神的支柱の問題，社会の世俗化と個人の宗教への回帰，といった切り口から調査することで，チャーチのあり方や抱えている問題を内面から捉えなおすことができ，この分野に新たな発見が期待できる。また，現代における宗教と社会の関わりのあり方について，社会の辺縁に置かれやすい越境者の視点からの研究を行うことで，宗教の意義に対する新たな問いを見出すことが可能になるといえる。

参考文献

【全体】
釈徹宗・細川貂々・毎日新聞「異教の隣人」取材班 2018『異教の隣人』晶文社
高橋典史・白波瀬達也・星野壮（編著）2018『現代日本の宗教と多文化共生――移民と地域社会の関係性を探る』明石書店
徳田剛 2015「被災外国人支援におけるカトリック教会の役割と意義――東日本大震災時の組織的対応とフィリピン系被災者への支援活動の事例より」『地域社会学会年報 27』pp. 113-126
文化庁文化部 2013『在留外国人の宗教事情に関する資料集――東南アジア・南アジア編』文化庁文化部宗務課
文化庁文化部 2014『在留外国人の宗教事情に関する資料集――東アジア・南アメリカ編』文化庁文化部宗務課
三木英・櫻井義秀（編著）2012『日本に生きる移民たちの宗教生活――ニューカマーのもたらす宗教多元化』ミネルヴァ書房
三木英 2012「宗教的ニューカマーと地域社会――外来宗教はホスト社会といかなる関係を構築するのか」『宗教研究 85（4）』pp. 45-70
三木英（編）2017『異教のニューカマーたち――日本における移民と宗教』森話社
吉原和男・クネヒト，ペトロ（編）2001『アジア移民のエスニシティと宗教』風響社
【フィリピン】
市川誠 2015「フィリピン人移民と宗教――オーストラリアと日本の教会にみる」『立教大学教育学科研究年報 59』pp. 3-14
カスヤ，マリア C. 2008「インタビュー記録 4――日本のフィリピン人共同体」『上智アジア学 26』pp. 153-175
川口薫 2008「インタビュー記録 2――カトリック東京国際センター（CTIC）の活動」『上智アジア学 26』pp. 113-134
川添航 2020「在留外国人の社会関係形成・維持における宗教施設の役割――茨城県南部におけるフィリピン人を事例に」『地理学評論 93（3）』pp. 221-238
坪田光平 2013「フィリピン系結婚移民とエスニック教会――『エンターテイナー』をめぐる価値意識に着目して」『社会学年報 42』pp. 97-107
寺田勇文（編）2019『ワークショップ記録 フィリピン出身者を迎え入れて――3/11 被災後のカトリック大船渡教会を中心に』上智大学アジア文化研究所
永田貴聖 2018「宗教関連施設を通じたフィリピン人移住者たちのネットワーク」高橋典史・白波瀬達也・星野壮（編著）『現代日本の宗教と多文化共生――移民と地域社会の関係性を探る』明石書店，pp. 155-179
ニコラス，アドルフォ 2008「インタビュー記録 1――外国人とともにつくる教会」『上智アジア学 26』pp. 97-112
野入直美 2016「沖縄・先島諸島で暮らすフィリピン人女性たちの生活世界――ネットワーク，リーダーシップと次世代継承を中心に」『移民研究 11』pp. 7-36
ボニファシオ，フィリップ 2008「インタビュー記録 3――フィリピン人共同体　司祭の立場から」『上智アジア学 26』pp. 135-152
松田良孝 2016「沖縄県石垣島にみられるフィリピン人ネットワークの態様――カトリック

信仰を核に構築されたつながり」『移民研究 11』pp. 55-67
マテオ，イバーラ C.（著）・北村正之（訳）2003『「滞日互助網」――折りたたみ椅子の共同体』フリー・プレス
三浦綾希子 2012「フィリピン系エスニック教会の教育的役割――世代によるニーズの差異に注目して」『教育社会学研究 90』pp. 191-212
【ベトナム】
川上郁雄 2001a『越境する家族――在日ベトナム系住民の生活世界』明石書店
川上郁雄 2001b「在日ベトナム系住民の宗教実践とエスニック・アイデンティティ」吉原和男・クネヒト，ペトロ（編）『アジア移民のエスニシティと宗教』風響社，pp. 45-70
川上郁雄 2002「ベトナム系住民――日豪の若者意識の比較を通じて考える」『アジア遊学 39』pp. 112-122
川上郁雄 2008「『ベトナム難民』受け入れ三十年後のベトナム系住民の現在」『アジア遊学 117』pp. 100-106
高橋典史 2014「宗教組織によるインドシナ難民支援事業の展開――立正佼成会を事例に」『宗教と社会貢献 4』pp. 1-25
高橋典史 2018「日本におけるインドシナ難民の地域定住と宗教の関わり」高橋典史・白波瀬達也・星野壮（編著）『現代日本の宗教と多文化共生――移民と地域社会の関係性を探る』明石書店，pp. 67-88
野上恵美 2016「在日ベトナム人宗教施設が持つ社会的意味に関する一考察――カトリック教会と仏教寺院における活動の比較」『鶴山論叢 10』pp. 41-56
野上恵美 2018「異文化をつなぐカトリックの媒介力」高橋典史・白波瀬達也・星野壮（編著）『現代日本の宗教と多文化共生――移民と地域社会の関係性を探る』明石書店，pp. 89-108